

ひろひさ  
井上裕久さん(本名 周久) (高 26 昭和 49 年卒) 8 組 650 年の先の未来へ  
能楽師 (観世流シテ方) 京都能楽会 理事長



古くは奈良～平安時代に源流があるとされる能楽。室町時代の観阿弥、世阿弥から数えても 650 年以上の歴史があります。観世流シテ方の能楽師で井上家 11 代目の井上裕久さんにお話をお伺いしました。井上家は江戸時代(元禄期)より洛中にて商いをし、名字帯刀も許されていました。その一方、京観世五軒家である園家の弟子家でありましたが、五代嘉助のとき子息が園家の養子となり跡を継ぎます。やがて明治維新を迎え園家は絶えましたが井上家が、その芸系を継ぎます。維新では能楽は幕府の庇護を失い、多くの流派が消えてしまうような危機を迎えます。しかしながら井上家は、その危機を乗り越え大正時代には自前の能舞台である初代嘉祥閣を建てます。残念ながら第二次世界大戦時に御池通の強制疎開のため取り壊されてしまいましたが、戦後は明倫小学校の大広間に一時的に仮設され復活します。また昭和 36 年には現在の場所に嘉祥閣が再建され本格的に復活を果たします。来年で、斯道 280 年を迎える井上家。幾多の危機を乗り越え綿々と芸が継承されてきたのです。

5 歳で初舞台 能楽堂 (嘉祥閣) と芸歴は同じ

その 2 代目嘉祥閣の舞台披きの時 5 歳だった裕久さんが初舞台を踏みます。2 代目嘉祥閣と裕久さんの芸歴は完全に一致するわけです。修行はそんなに厳しくはな

かったと本人は言います。師匠である父がやってみせて、それをなぞって覚えると言うことの繰り返しだけだったと言うのです。しかし、ほぼ全ての土日に舞台があり、その稽古をしていたと言いますから、かなりハードな能楽漬けの日々ではなかったでしょうか。ただ本人はすごく楽しかったそうで、嫌々やっていたのではなかったために厳しく感じなかっただけなのかもしれません。

中学で声変わりもし、体も大きくなってくるとだんだんと子役ではない本格的な役もこなすようになります。堀川高校に入学をしてからはユネスコクラブ、美術部などに所属し見聞を広めていきます。自由な校風の中、悪友達といたずらをしたり文化祭の企画を考えたりと学校生活を存分に満喫します。この頃にはよく「最初からやる仕事が決まっていることに抵抗はないの?」と聞かれることもありましたが、能楽が基本好きであり、そういう葛藤はなかったそうです。今でもサラリーマンが勤まるとは想像できないと言います。卒業後、同志社大学に入学します。

東京で 5 年半の修行 京都に帰り本格稼働

大学を卒業後、東京の 25 世観世宗家観世左近師の元に内弟子修行に入ります。それまでの生活とは違い、朝、先生が起きる前に起き、家の掃除や食事の用意などをし、また先生について公演に



能楽堂 嘉祥閣

でかけ身の回りのお世話をする毎日となりました。舞台袖から、先生のみならず、いろいろな演者の芸を見ることが大変刺激になったそうです。日本全国、公演のあるところにはついて行き、その土地々々の現場というのも体感出来、視野が広がったと言います。このような生活がほぼ 5 年半続きました。これは本当に厳しいもので芸を磨くだけでなく人生観をも変える経験であったとも言えます。京都に帰り本格的に井上家 11 代目としての活動を始めます。父やお弟子さん達とともに京都を中心に芸道に勤めます。能一筋に 30 歳 40 歳と確実に実力を上げ中堅の演者としてその才能を発揮していきます。父親とともに京都の能楽を代表する演者となっていきます。しかし、裕久さんが 50 代にかかる頃父が脳梗塞で倒れてしまいます。一命は取り留めましたが舞台上上がることはできなくなりました。それでも父親が生きている間は教えを請い意見を聞き、多くの決断もしてもらい大きな支えでした。3 年前に亡くなられると、完全に井上家をひとりで背負うこととなります。全ての判断を自分で行わねばならなくなり、



船弁慶 2015 年 4 月堀川高校同窓会にて

その難しさから父親の偉大さを強く感じておられるようです。

一方で、裕久さんの息子さんは、裕久さんよりも早く3歳で初舞台を踏みます。12代目の誕生です。12代目も昨秋父親が行ったように東京の宗家に内弟子修行に入りました。次代への継承は確実に行われています。

## 650年の歴史のその先へ

12代目は能楽を継承することを決意されました。しかしその先はどうでしょう。

皆さんは能と聞いてどんなイメージを持たれるでしょうか？幽玄の世界、高尚な伝統芸能でしょうか？正直に言えば、難解でよくわからない、動きが少なくて退屈だという方も少なくないでしょう。実際に舞台を見たという人も少ないのではないでしょうか。昔は教養の一つとして能や謡を学ばれる人も多かったのですが、現在のお弟子さんや観劇をされる方々は次第に高齢化し、若い人たちの参加も少なく能楽に携わる人たちは減少しています。どうやって、その面白さを伝えていくのか？若い人たちに継承してもらうためにはどうすればよいのか？海外の人たちへの発信はどうすればいいのか？インターネットなどの新しい媒体には、どうアピールすればいいのか？何か新しい切り口や手法を見つけなければならないという危機感は強くなるばかりです。ただデジタル化しわかりやすさを追求するだけでは問題の解決にはなりません。裕久さんは、今650年に及ぶつながれた歴史を未来へ継承し能楽を普及啓蒙させていくためには、何が必要なのかを模索し、新たな挑戦も続けられています。公演の日程は井上裕久さんのホームページ等に載っています。一度どんなものか観に行ってみませんか。ホームページはこちら <http://www.inoue-hirohisa.jp/>

2016年4月取材 起稿・取材・撮影 河岸勝弘



能楽堂嘉祥閣の能舞台